

卓 話

平成 23 年 9 月 13 日

『災害と美術館』

岐阜県美術館
館長 古川秀昭様

今日は明るくないタイトル「災害と美術館」でお話いたします。かつて、阪神淡路大震災では、美術館は災害時の「避難所」とであると提唱しました。普段あまり美術や美術館に縁のない人たちが美術館に非難せざるを得なくなって、思いがけず美術と遭遇します。美術館がそういう消極的な面から役に立つことだってあります。今回、あの東日本大震災では、亡くなられたか行方不明の方が 2 万人です。今回も宮城県美術館は 3 月 11 日当日の夜に、ライフラインを失った 60 名の方々の避難所となり大いに地域に役立ちました。



しかし、よく考えてみますと「美術館は災害時でなくとも悩める現代人にとって、常に避難所である」と言ってもいいでしょう。文明国日本では毎年 3 万人を超す大勢の方が自殺（自死）でなくなっています。悲しい現実です。

死の道を選ばざるを得ない背景の多くは、経済的理由のようですが、その根本はやはり、生きる力の喪失と孤独ということでしょう。現在、東日本の被災地における課題の一つは、今やもう飲食物や衣類の物質的不足を満たすことではなく、生きる力を保ち、それをどうすれば湧き上がらせることができるか、です。イギリスは早々にスケッチブックとクレヨン避難所に空輸してきました。実に苦境にある人間が究極で「色彩と形」を欲求することを知っていますね、イギリス人は。そこで私たちも半年過ぎた被災者のためにも、社会のためにも、美なるものに目と心を向ける時です。もはや芸術はわからないとか美に無関心でいると、そのような生活の後遺症は不安、めまい、憤り、孤独・・・を招きます。そのことが自分自身と周辺にいる人々を辛い心地にしてしまいます。ですから、皆さん気軽に普段から岐阜県美術館に出かけ、いい作品に出会ってください。自分自身と家族や、知人たちにきっと生き生きした表情と力を発信するようになります。皆さんの税金で成り立っている岐阜県美術館には、見る人を力づけるいい作品がいっぱいあります。さらに、できれば自分の生活空間に気に入った絵や作品を飾ることです。生活が変わり、自分が変わり、生きる意欲が湧き上がります。困窮する時代こそ美に憧れましょう。